

日本語教育での教授法について ①

LL (Language Laboratory)

天理の語学教育を語る上で外せないのが LL (Language Laboratory) である。語学教育といえば LL という時代でもあったように感じている。LL に関しては、筆者の大先輩である天理教語学院の渡辺治則前校長と、別科に勤務していた頃の LL の長所・短所についてよく話をした。また筆者が現在、『グローバル天理』に連載しているのも、参考にと天理大学の LL に関する資料もいろいろ紹介していただいた。

『天理大学ふるさと会報 (二代真柱様 30 年祭記念特別号)』第 44 号 (1997 年) には、2 代真柱の海外布教にかけける思いや歴代の天理大学学長の話が詳しく書かれている。天理大学の前身である天理外国語学校は、語学を身につけると同時に、教を外国に広めるといふ海外布教の一環として設けられた。その目的を達成するために新しい教授法の研究が進められ、そうしたこともあって、新制大学になった後に LL を活用した語学教育が始まった。昭和 35 年頃、機械を利用した外国語教育は、すでに青山学院大学、京都学芸大学、南山大学、京都外国語大学などでも行われていたようだが、テープレコーダーの発達に伴い天理大学独自の LL の開発が始まったのである。

LL 機器の開発

LL を利用した天理大学の語学教育は、大きく 2 期に分けられる。第 1 期にあたる LL 機器の開発には、天理市内の電器店「天恵堂」の仲谷澄男・仲谷俊二両氏が関わり、数社のメーカーに制作を依頼し、試作機ができあがった。このシステムは高く評価され、全国の LL 教育関係者が天理に見学に来たようだ。第 2 期は、昭和 40 年の校舎移転につき、南棟校舎地下 1 階に新しく LL を設置した頃である。第 1 期から続く LL 教材の開発や教授法の研究の成果が新しい LL に注ぎ込まれて、機器もソニーの最高技術陣により作られた。これらの新しい LL は「天理大学方式」と当時呼ばれていたようで、日本の LL 機器のモデルともなったものである。天理大学で筆者が韓国語を学んだ時の LL は、この第 2 期のものだったと執筆しながら知ったが、ブースにもテープにも「SONY」の名が入っていたのをよく覚えている。筆者が別科勤務時代に使っていた LL 機器も、同様にこの頃のものであったように記憶している。教師が機器を操作するブースにはオープンリール式のテープレコーダーがあり、パーティションで仕切られた学生のデスクにはカセットテープレコーダーが埋め込まれ、これを制御するスイッチなどが配列されたコンソールがあったように記憶している。教室も空調が完備された防音の部屋であった。1980 年代の別科での LL や文型練習については、『天理大学別科日本語課程紀要』第 1 号 (1986 年) に、「文型練習と視聴覚教材の利用について」(渡辺治則) という論文があり、当時の様子を知ることが出来る。

語学の天理

余談になるが、天理大学の LL 教室の機器開発に携わった上記の天恵堂の仲谷俊二氏は、筆者の別科勤務時代の同僚でもあった仲谷宏巳氏の御尊父である。後に宏巳氏から聞いた話だが、御尊父の俊二氏はカセット式のテープレコーダーが一般にも普及し始めた頃、テープのトラックを分けて一方でネイティブの教師の音

声を録音し、他方で別のトラックに学生の音声を録音し、後でテープを再生した時に、自分の発音とネイティブの発音を比較して聞いたり、何度も自分の音声を録音したりすることができる機器の開発に携わっていたそうである。この開発には当時の天理大学教員の要望が取り入れられていた。仲谷俊二氏は LL 機器を利用して外国語を学んだ天理大学の卒業生は、各方面で外国語のスペシャリストとして即戦力になり、高い評価を得ていたと語っていたようだ。それを裏付けるかのように、天理大学からは、外交官のほか、各国の大使館や領事館の勤務者、あるいは通訳者を数多く輩出していることを筆者も聞いている。当時、外国語学部内のどの学科でも、授業の中でネイティブでない教員がネイティブの発音を学生に聞かせることができ、それを聞きながら発音を矯正していくことができる機器の開発は重要だったと思われる。仲谷宏巳氏からいろいろ話を聞いている時、「そういえば写真があった」と古いアルバムを出してきてくれた。俊二氏が撮影された写真のようで、教師用のコンソールが写っているのがわかる (写真 1)。



「写真 1 教師用コンソール」

これは昭和 51 年に写した

ものようだ。もう一枚は LL 教室の模型のような写真である (写真 2)。この写真を見ていると、技術者や教職員など関係者が集まって、いろいろ意見交換をしながら、より良い語学教育を目指し、開発を進めていたのだろうと想像できる。天理大学外国語学部の出身者は、同窓会などでも、よく学生時代は LL 教室で発音の矯正や文型の練習をやっていたと懐かしく話すことが多い。筆者もそうであるが、それほど LL 教室が活用されていたということである。



「写真 2 LL 教室の模型」

現在、天理大学の地下にあった LL 教室は、時代の流れでカセットレコーダーがパソコンに取って代わり、新たに CALL 教室として活用されている。機器の進歩は目覚ましく、アナログからデジタルに変わっていくのは、自然なことであろう。しかし、いつの時代でも、機器に詳しい技術者、教職員が語学教育のために協力し合って、それぞれ知恵を絞り、意見交換をしながら進めて行くことが大事だと、筆者は思っている。なぜなら、いかに優れた機能を持つ機器であっても、どの場面でもどのように機器を活用していくかを、技術者と相談しながら進めていかなければ、効果的な授業は行えないからである。

不思議なことだが、筆者が今、この原稿を書いている日の朝、通勤途中に偶然にも仲谷宏巳氏と会い、御尊父が 2 か月程前に亡くなられたことを聞いた。存命であれば、さらに興味深いことを聞けたかもしれないと思うと残念である。